

## 第三のカラー・ラインと「日本人」カテゴリ

### ー＜帝国＞の振る舞いコードの共有度合い によるヒエラルキーー

前田 悟志

グローバリゼーションにより人々の感覚や振る舞いは国境や民族集団の垣根を越えて通約は進んでいるのだろうか。「待避的人種差別」あるいは「第三のカラー・ライン」は生物的差異による古典的な人種差別と異なり、規範や振る舞いの非共有による社会的分離で、政治的、経済的な境界線はのり越えても私的領域での関係性への受け入れには障壁が残されているという脱工業化社会の境界である。

本研究では「日本人」が「西洋圏」において経験する境界線を追った。J-Stage上の文献を中心に、他には関連の著名な諸文献をあたった。

知見は三つ。①中国の台頭により「西洋圏」における「日本人」への待遇は軟化した事例が目立った。②日本がアジアからのローンプレイヤーでなくなった。③エスニック・ヒエラルキーの変化のように見えなくもないが、「西洋」視点という構図は変化無し。三番目の知見は「西洋圏人」と豊富な接触をもつ「日本人」男女 12 名を対象にして彼らの「西洋圏人」とのつながりの内容を聞き取った面接調査から導いた。結果、日本人を対象とした待避的人種差別はこれまでの学術研究のなかでは適応不全として扱われてきた可能性が示唆された。

これにより「日本人」を「西洋圏」における待避的差別の対象として扱い、情緒的距離感の変化を追うことで、グローバル秩序の質的变化を明らかにする意義が確認された。今後は他の方法でもこの目的に迫る価値があると言える。

キーワード：新しい人種差別、第三のカラー・ライン、異文化適応

## 1 はじめに

### 1.1 問題の所在

グローバリゼーションと言われて久しいが、異なるエスニック・カテゴリー間（内の差異の存在を否定しているわけではないが）の感覚的、振る舞いコードの共有は進んでいるのだろうか。進んでいるとしたらどの方向に向けて通約され、その方向性を指定している主体はどこなのだろうか。この振る舞いや感覚の距離感を考察する上で有用な概念に第三のカラー・ラインがある。パーソナルなつながり、関係領域を防衛する線である。1965 年のハーバート・ブルマーの用語で、一番外側の政治的利益を守る第一の線、経済的利益を防衛する真ん中の第二の線と合わせ、三重の線は欧米での人種間の境界線の侵食度合いを示したものであった。後に、この三つのカラー・ラインの概念は Louk Hagendoorn (1993) によって再発見され、古典的人種差別の概念とあわせ、80 年代以降の象徴的人種差別、待避的人種差別の三つの概念とのパラレルな関係を見出された。象徴的人種差別と待避的人種差別はあわせて新しい人種差別と呼ばれ、あからさまな古典的人種差別的表現が規制された脱工業化社会において現れた分かりにくい漠然とした人種差別であるといわれている。

パラレルというのは次の類似である。カラー・ラインの一番外側の線、そして古典的人種差別の概念はいずれも人種にもとづいた隔離、分離で、使えるトイレや交通機関での席や飲食店内での席が人種によって分けられているなどが一例で、政治的文脈、公的な文脈での闘争である。第二のラインと象徴的人種差別はどちらも経済的平等から人種的マイノリティが排除されている境界線であり、経済的、社会的機会の不平等分配が争点となる。最後のパラレルな関係は、情緒的な境界線を取り扱う第三のカラー・ラインと待避的人種差別である。

第二のカラー・ラインという用語は使用してなくとも、それに相当する経済的権益や社会的機会不平等という争点は従来の差別や排除の問題で繰り返して語られ、取り組まれてきたが、地理的に世界を覆うような枠組みのなかで、「日本人」をその被対象として扱う場合、第三のカラー・ライン、あるいは

待避的人種差別に相当する分断についてはすくなくとも、日本の論壇においては等閑視されてきた。

本稿のキーワードに「人種差別」の文字があるが本稿はアクティビスト的なスタンスを志向しない。それにもかかわらずこの用語を使用するのは、第三のカラー・ラインは文化中心主義的な視点と密接に関係しており、どちらにしても払拭されているとは言い難い現状を描写するのに有用であること、また欧米における待避的、あるいは新しい人種差別概念をあつかった一連の研究、そして同用語を使用するアントニオ・ネグリ&マイケル・ハートの〈帝国〉<sup>1)</sup>概念（2000=2003）と接続するためである。

通常語でもあるカラー・ラインとは人種間の互いに対する姿勢（黒人の白人に対する劣位）を規定し、アクセスの度合いを制限し、それぞれの行動の様式に対して境界線を挟んで社会的分離がされており、その分断には両側の人々に共有されている明確な序列が存在する。ブルマーの独自性はこの境界線を上述の三つの段階に分けたことである。ブルマーの時代、ラインは黒人と白人間の分離をもっぱら指していた。政治的参加、公的空間における排除を示す第一の線、社会的機会、経済的機会からの排除を指す第二の線、それらは法的に規制することが可能であったが、本稿で主として取り上げる一番内側の第三のラインは原理的にこうした外部からの攻撃は無効で難攻不落とされている（Blumer 1965）。この最も内側の親密で私的な社会関係の防壁の例としてブルマーが挙げるのが、社交仲間、小さな友人グループ、プライベートクラブ、家族親族、恋愛関係、結婚などである。

本稿においては、この第三のカラー・ラインと、Hagendoorn がそれとの類似を示した新しい人種差別の一つである待避的人種差別を同定できるとみなし、さらに、この社会的分離の概念が日系米国／カナダ人を対象とするものとしてではなく、ネグリ&ハートらの〈帝国〉における新しい人種差別の視座を援用することで、日本列島出身の「日本人」が「西洋圏」<sup>2)</sup>においてその第三のカラー・ライン／待避的人種差別の対象となりうることを論述する。

## 1.2 本稿の目的

本稿の根本的な目的は一連の「新しい人種差別」研究の対象に「日本人」というエスニック・カテゴリも位置づけるべきと主張することにある。アメリカの覇権凋落と、非西洋世界の台頭という移行期を迎えたグローバル秩序の中で、エスニック・カテゴリ（グループではなく<sup>3)</sup>）としての「日本人」は西洋圏においてどのような立ち位置をもっていて、第三のカラー・ラインはどれ程解消・変容しているのかを追うことで、グローバル社会の動態の質的变化を嗅ぎ付けることができるだろう。この根本的な目的にあたり、次の3つの問いに回答することで議論を展開する。第一に、新人種差別の研究に「日本人」が対象になってこなかったのはなぜか。そして第二に、実際には「日本人」は待避的人種差別の対象になっているのか。第三に、その序列に綻びはみられるか。グローバル社会の動態要因には台頭してきた中国と比較される「日本人」という概念がキーとして聞き取り調査の語りから浮かび上がった。このキーが「日本人」と「西洋圏」との境界線形成にどのように働いたのかを考察した。

次に、第三のカラー・ライン、新しい人種差別の概念を概観し、この概念に「日本人」をのせる意義を挟んでから本論へと続ける。

## 1.3 第三のカラー・ライン、新しい人種差別の概念

「新しい」というが、用語としては1970年にJoel Kovelによって使用されたのが初出で、しかし実質においては、公民権運動を受けて新旧の人種差別を明確に変遷として区別する報告は1965年にすでにあつた(Blumer 1965)<sup>4)</sup>。北米の黒人コミュニティの平等への闘争は、次の三重線を順に攻撃してきた。ブルマーによると、黒人を対等ではない市民であるという信念が白人間で集合的に共有されており、また同調圧力が強力にある。このようなエスニック・ヒエラルキーは差別的な人も、またそうでない人の間でも共通していることが報告されており、ブルマーのそれは社会圏で共有される集合的意識・集合的信念という説明とHagendoorn & HraBa (1987)による80年代オランダでの実証は整合的であることが確認されている。この題目は心理学の領域でも取り扱われることが多く、彼らが実証から出した処方箋は待避的人種差別者の

良心に訴えるもので、自らは人種差別に反対であるという自己認識と、自身の実際の行動との乖離を認識させることで一時的に改善され、自己内省を継続的に促し、訓練することで持続的なものにする方法 (Dovidio et al. 2000 など多数) が概ねの共通回答だった。

実際、待避的人種差別者の大半にそれだけの善意にもとづく意図的な訓練を自らに課すことを要求するのは困難である。加えて、Pearson et al. (2009) の待避的人種差別批判の理論的支柱のひとつは、多国籍企業などにおける多文化チームのパフォーマンスが待避的差別によって大きく毀損されているというものである。待避的差別解消の正当化図式が経済的効率性追求に回収され、このような目的から異文化の差異に対処し、差別をのりこえようという言説や研究は非常に多い。皮肉にもこれはネグリ&ハートのいう<帝国>の特徴であり、その駆動源である多様性の管理になる。

新しい人種差別の概念は80~90年代にはその他のエスニック・カテゴリをふくめた序列を扱う概念として用いられるようになったが (Hagendoorn & Hrabá 1987) , 以降で触れるように、「日本人」が被差別対象として現れる場合でもあくまで日系であったのである。

#### 1.4 「日本人」をこの議論にのせる意義

次に、なぜ「日本人」をこの議論にのせて語ることができるのか、そしてその意義を示したい。そのためには、ブルマーの時代においては、黒人－白人間という生物的人種間の問題として扱われていた第三のカラー・ラインがその後の議論においていかに、生物学的異なりから離れ、さらに領域内的枠組みからも抜け出した概念に展開されたのかを簡便にでもたどる必要があるように思う。そのために、Hagendoorn らとネグリ&ハートの新しい人種差別概念を中心に振り返ることにする。

Hagendoorn (1993) のこの分野における仕事は、新しい人種差別概念にブルマーの三重のカラー・ラインの議論を接続させることによって、古典的人種差別から新しい人種差別への連続性を示したこと、また、生物学的差異よりもステレオタイプにもとづく社会文化的差異の方がよりエスニック・ヒエラルキーの認識に寄与していたことをオランダを例に実証したわけで、彼を

ことさらにここで引用するのもそのためである。つまり、下層に位置づけられているエスニック・グループほど、カラー・ラインの外側に近いところしか受け入れられていないことが見出された。また、前述のエスニック・ヒエラルキーとは社会圏で共有される集合的信念であるという1965年のブルマーの主張が裏づけられたわけだが、それはこのヒエラルキーは差別的である人もそうでない人からも同様の序列が引き出されたという知見に拠っている。

新しい人種差別の概念にはさまざまな論者がいるが、共通している見解は (Hagendoorn 1993; Michael Hardt & Antonio Neguri 2000=2003; Pearson et al. 2009; 関根政美 1994 など) 60年代の人種主義撲滅の流れによって、生物的差異にもとづく明示的な差別・排除行為にむしろスティグマが伴うようになり、法的にも規制されるようになったため、差別的表現は深く潜行し、生物的差異にもとづかず、規範、世界観、振る舞いなどの異なりを根拠に社会的分離が図られるようになったことを指している。

生物学上の差異と社会文化的差異のどちらがエスニック・ヒエラルキー構成上の決定力をもつのかという問いは、すでに見たように Hagendoorn & Hraha のオランダでの調査報告結果 (1987) では、生物学的差異も一定の影響を持つが、ステレオタイプにもとづく認知された社会文化的な差異の方が決定的であるという仮説が支持された。実証にもとづかないがネグリらの見解では、分離・隔離の原則は生物的差異ではなく、文化などの社会構成主義風に説明され、生物的差異は必然ではなく偶然的とみなされるものの、社会的分離を固定する有徴性として機能しているとしている。どちらの見方が妥当であるかの検討は本稿では扱わないが、ジェンダーと身体をめぐる類似の争点があるように、この分野にも存在する。この点を考慮すると、近年のアジア系北米人とアジア圏からの新移住民の関係性も見えてくる。社会的差異に求められる新しい人種差別の定義は、共通のエスニシティを有する人々の間での“FOB<sup>5)</sup>”や“Whitewashed”などの差別用語や現象 (Pyke & Dang 2003) にもあてはまることを指摘したいが、生物的差異に派生し関係はあるものの、表現としては生物的差異から一定の距離を置いている新しい人種差別は、例えば、米国生まれの東アジア系と東アジア育ちの米国への新移住民とのケースである。以上に見たように古典的人種差別は生物学的差異に重きが置かれ

ていたが、新しい人種差別は生物学的差異と決別したわけではないものの、より社会文化的説明に重心の乗ったヒエラルキーになったことが確認された。

次に、ネグリらを見ることで新しい人種差別概念が脱領域的広がりにもかかわらず語ることが可能になったことを示したい。ネグリ&ハート（2000=2003）によると、新しい人種差別は＜帝国＞の駆動原理に適合的で、あるいはそれに使役されるために上記のような人種差別の変化は、リベラルで、多様性を礼賛する態度が招いた新しい形態の社会的分離と統合のあり方であるという。彼らの＜帝国＞概念は実証困難だが、グローバル秩序の中心のひとつに米国があり、それを取り巻くような諸々の影響力発信源たるアクターネットワークがあり、今でも世界の多くの文脈の中で西洋世界の影響は至る所で健在であることは否定し難い。この一連のグローバル世界の秩序のひとつの潮流である多様性の管理では、異種混交が政治的適切さの上ではリベラルに等価値を与えられつつ、諸々のエスニック・カテゴリーは示唆的包摂、すなわち、中心的な規範との差異の度合いにもとづいた包含（Hardt & Neguri 2000=2003: 252）のなかに取り込まれる。＜帝国＞と呼ぶか否かは別としても、そのなかでの示唆的包摂とは、西洋世界を頂点とし、そこからの近似の度合いによって序列づけられる諸々のエスニック・カテゴリーである。このエスニック・ヒエラルキーは、70年代から続く一連の「待避的人種差別」をめぐる研究に前述に見るように接続していた（Hagendoorn 1993）。すなわちその序列の下位ほど距離を置かれる。そして、このヒエラルキーは前世紀までのような国民国家全盛の時代と異なり、＜帝国＞における新しい人種差別はネーションの枠を超え、脱領域化した。

ここまでで、生物学的差異にもとづく古典的人種差別が人種差別撲滅運動と脱工業化社会の＜帝国＞時代において、生物学的差異を根拠としない差別あるいは社会的分離に移り変わり、さらに脱領域的なイシューとなっていったことを確認した。次は日本がそこにどう関わるのかである。

近代化は西洋化を意味しなかったと繰り返し言われている。多様な近代化が観測されるようになり、そのひとつに日本も数えられ、西洋的ではない近代化を遂げた。ネグリらの想定する地理的に全世界を覆うフレームワークの中で三重のカラー・ラインを適用すると次のようになる。つまり、経済的な



繁栄を達成し、いまだ西洋圏の影響力が強いグローバル社会での経済的利益を防衛するカラー・ラインの二番目の線を日本は踏破した。しかし近代化とは主に工業化のことであり、それは直接的には第二のカラー・ラインしか破れないこと、そして同時に新しい人種差別のなかでもプライベートな領域での接触を回避する第三のカラー・ラインをめぐる闘争がはじまり、待避的人種差別の対象に入れられたことを意味していたという見方が可能になるだろう。

待避的差別、第三のカラー・ラインの変容は、グローバル秩序の質的变化である。今もなお西洋側に乗っている世界秩序のその重心が移動・分散されるならば、エスニック・ヒエラルキーに反映される。序列付けの評価者軸の多元化が「西洋圏」でも進むならば、それはグローバル秩序の根本的な変革を意味する。エスニック・ヒエラルキー、待避的人種差別の変化を追うことにはこうした意義がある。これまでもエスニック・ヒエラルキーの変動の研究は多いが、日本列島からの「日本人」をアウトグループの一つとしたこの系統の調査は管見の限りなかった。それは一つには脱領域的な視点を欠いていたためと思われる。この一連のエスニック・ヒエラルキーの研究の系統に「日本人」を対象として入れるべき次のような理由がある。

世界秩序の表舞台では西洋諸国のみがキャスティングされていた時代から非西洋としては先進国クラブに出入りをしていたローンプレイヤーであった。また 90 年代後半に入るまでのジャパンバッシングの時期を経て、今、中韓、東南アジア諸国など他アジアの隆盛の時代に入り、日本を取り巻く状況は大きく変化している。このようなグローバル秩序のなかでのその特異な立ち位置ゆえに、第三のカラー・ラインへの侵食がアジアの中の非欧米言語圏では「日本人」が相対的に近いことが予想される。それゆえに＜帝国＞内で脱領域的な場で対外接触をするエスニック・カテゴリとしての「日本人」を対象として、ヒエラルキーの中で彼らがどのように位置を変えてきたのか、第三のカラー・ラインが消失する兆しを調べることにこうした意味がある。



## 2 第三のカラー・ラインと「日本人」

### 2.1 第一の問い：第三のカラー・ラインの研究に「日本人」が対象になってこなかったのはなぜか

それでは最初の問い、なぜ「日本人」をエスニック・ヒエラルキーのアウトグループとして扱った研究がこれまで無いのか。

まず第一にアカデミズム外の文脈における一般の人々にとって、「日本人」を対象としていなくとも、待避的人種差別は、人種差別という既存概念と認識上一致し難く、わかりにくい差別になっていることは、Pearson et al. (2009) が指摘しているとおりだ。つまり必ずしも生物的な人種間の差異を基盤にしていなかったため、人種差別とは認知されない。友情も道具的な文脈があれば支障なく成立するし、社会的交換財が豊富な個人が適切な社会的環境にいる限り、概ね不快な経験はしにくい。多くの日本人は商業的なつながりこそあれ、情緒的には西洋世界から距離があり、本稿で問題にしていることが社会問題として認識されにくいだろう。後述の第三の問いで紹介する今回の聞き取り調査全体からも伺えたのは当事者がそれを人種差別としては捉えていないことが多かった事だ。認識がある場合でも漠然としたものがほとんどであった。これは第二の問いと重なり、むしろ個人の適応の問題として扱われることが多い。

第二には、アカデミズム内にも適用できるとは断定できないが、時代を包む風潮である。日本の多くの人々にとって、日本や日本人、日本の「文化的」特徴が待避的差別や、嘲笑の対象になっているとは考えづらい状況にある。事実、＜帝国＞の支配的アクターの一環に日本が取り込まれていたりする。また、日本人が消費する主なメディア情報は日本人に耳障りが良いもので溢れている。このように様々な状況が、被差別対象になっているとは考えにくい状況があることの要因になっている。第一と第二の要因はあわせて当事者が外在的な問題として顕在化させにくい状況であり、それがアカデミアでも社会学的命題と認識されづらい背景だろう。

第三の要因には、指摘内容そのものはその通りであるものの、文化の異質性への言及、あるいは文化的差別の問題化は皮肉にも再帰的に文化の可塑性

を奪いがちであり、通文化性の認知を阻害してしまう危険を考慮する語り（吉野 1997 など）があることも無関係とは言いきれないだろう。つまり、待避的差別は文化相対主義的な態度が招いている一面がある（Hardt & Neguri 2000 = 2003）のだから、その陥穽を避けようとするあまり、言及せずに、あたかも待避的差別の実態がないかのように扱われてきている可能性だ。それは個々人が実際の相互行為において考慮すべき面であり、研究上において、文化的相対主義から招来される待避的差別、あるいは文化的差異の諸側面を取り扱うことを抑制する論理にはならないだろう。

## 2.2 第二の問い：実際には「日本人」は待避的人種差別の対象になっているのか

あらためて英文で modern racism あるいは new racism, neo racism, aversive racism を CiNii で調べると、この分野の研究は非常に多く、日系移民についての言及も散見されるのだが、「新人種差別」あるいは「新しい人種差別」研究の J-Stage 上の和文文献は関根(1994)を例外にほとんどみあたらない。その関根にしても「日本人」を被差別対象としていない。「新人種差別」の研究の中では日系移民を例外として、「日本人」はほとんど対象にされてこなかったのだ。では、実態としては日系人以外の日本人が西洋圏において境界線を経験することはないのだろうか。次に日本列島出身の日本人が境界線を感じる場合を文献から辿る。

ポスト戦後～中国台頭前の時代の「日本人」の扱われ方を手始めにマクロな国際関係の文脈から確認すると、周知のとおり、80年代に経済的な脅威として日本は欧米でとらえられ、ジャパンバッシングのピークもこの時期だ。しかし90年代後半になると先進国入りすると陥る低迷期になりバッシングも落ち着いた。入れ替わるかのように2000年代も後半に入ると欧米圏でチャイナバッシングが目立つようになる<sup>6)</sup>。

例えば、80年代の様子を記した稲村博(1980)の「日本人の海外不適応」は参考文献としてこの手の研究において頻出である。この文献中では待避的人種差別に該当するだろう事例が複数挙げられている。一つ挙げると次のものである。

やはりある駐在員夫人の話であるが、この主婦は最近いささかノイローゼ気味になっている。その理由は階下に住む大家さんからしょっちゅう騒音についての注意を受けるからである。子どもを泣かせるなとか、家の中で子どもを走らせるな、歌を歌うな、テレビは低音にしろ、等々である。(中略) みそ汁をつくっていたところ、醜悪な臭いをたてないで欲しいと上の階からねじ込まれた。(稲村 1980: 42)

稲村自身のそれらを指して「人種差別とは言い切れない」(1980: 42-4) という主張<sup>7)</sup>からみるに、古典的な人種差別との差異に気づいてのことと思われる。

「不適応」を説明する文献は2000年以降の状況を示す記述になると豊富で、津久井要(2001)や、岩崎信彦ほか編(2003)などの新移住民がアメリカ人と相容れない、アメリカ社会に溶け込めないという事例を確認できる。待避的人種差別は「文化」的な差異にもとづく境界線を基盤にしているため、「不適応」あるいは「適応不全」と相互入れ替えが可能である。

一方の「人種差別」として取り扱っている和文文献は稀で、櫛本崇恵(2009)の報告では人種差別の新旧の区分がされていないが、2004～2007年の事例で挙げられている英語圏(米、加、豪だが、分析上の区別はない)での日本人渡航者が経験している境界線を人種差別であるとしている。多くの事例を取り上げていて、内容はまさに待避的人種差別と同定できるものを多く含んでいる。その内の一つを紹介する。カナダの某大学の学部生である日本人女性Bさん、当時21歳の2006～2007年の事例で、グループワークのドキュメンタリーテレビを製作するという課題で、イギリス人二人、フィンランド人一人の全て女性のグループに入った。

3人はBさんを完全に「ルックダウン」し、無視した。撮影の予定を組むのもいつも3人であった。

B:「いつ、どこに来て」と言われて行くとすっぱかされたことがありました。あとで、どういうことなのか聞くと「昨日やったよ、あなたは

予定を聞き間違えたのね」と言われました。予定を聞き間違えたわけではないと文句を言っても、「ごめんごめん」で、ごまかされました。最初は落ち込んで、私の何が悪い？とふさぎ込みました。

その 3 人グループは、B さんがあいさつしても気分しだいで無視した。他の学生から、「彼女たち、日本人は嫌いと言っていた」と教えられた。

B: 日本人はなぜ嫌われるんだろうと思いますね。こういうことが続くと、陰で何を言われているのかなということに過敏になりました。

B さんが寮に入る 3 年程前は、寮内でジャパニーズ・バッシングがあった。現地のアメリカ人学生が日本人の持っている MD プレーヤーを盗み、その上壊して部屋に戻したり、郵便物が隠されたりした。「日本人は冷蔵庫に物を入れすぎる」と文句を言われるなど、日本人の一挙一動すべてが怒りの対象だったようである。（櫛本 2009: 24）

この櫛本論文(2009)には類似の事例が多く紹介されており、諸々の差異からニューカマーに対する異質性嫌悪が発生しているという解釈だった。そこに紹介されている事例は第三のカラー・ラインの中でも差別側が意図して行った場合が多い。正確に言えば有意図か否かの判断は困難だが、被差別側の視点からは悪意を感じたということだ。第三のカラー・ラインにはそのような明白な悪意が必ずしも伴わないということは既出の Pearson et al. (2009) の指摘にもみるように、善意を持っていても作ってしまう社交での境界線という性質からも読み取れる。

このニューカマー差別は旧来は移民意識の希薄な白人層がメルティングシ難いアジア系などに行うものに限られていたが、先述のように近年ではしばしば従来の二世以降のアジア系からも、より新参のアジア系新住民や滞在者に対して行われる面もあり (Pyke & Dang 2003) , 生物的差異ではなく、規範／常識／振る舞いの非共有が対象になりうる「新しい」人種差別であることが鮮明だ。「人種」／“race”の単語はもはや修辭的で、実態としては記号的な序列を伴う社会的分離であることを確認できる。異人種間でも同人種間でも（同エスニシティ間でさえ）この現象において共通なのは、諸々の価値観のモードの差異に序列をともなった記号的価値がその時の強者によっ

て付与され、これまで、たいていの場合は「西洋人（特定の人種に必ずしも限定されず）」であったということである。待避的差別の背後にはこのような構造がある。

このように文献だけでも中国の台頭以前まで、継続的に日本人は疎外されることが多く<sup>8)</sup>、ホスト側の異質性嫌悪と呼ぼうと、参入側の不適応あるいは劣等感と呼ぼうと、それは待避的差別と通低する内容の経験をしていることが確認できる。しかし、研究上ではこの現象を第三のカラー・ラインや待避的人種差別という概念に接続させられてこず、主に不適応／適応という枠組みの中で、個人の資質や訓練可能な能力に帰属されがちな現象として取り扱われてきたことがわかる。ひとつそのような諸研究のなかでも著名なものを紹介する。端的に表現すると、価値観の多元性を認識する習慣の獲得までの訓練方法で、Mitchell Hammer et al. (2009)の“Intercultural Development Continuum”という概念がある。一元的な規範フレームワークを相対化することで、異なる思考習慣を持つ人々との相互作用で発生しやすい摩擦を縮減することを目的とするが、この技術は訓練によって、1. 差異の否定、2. 差異の極端な認識／差異からの防衛／自文化の否定、3. 差異の最小化、4. 差異の許容、5. 差異への適応、という五つの段階を追って変容する面があるとされている。真にそのような面があることは否定し難い。しかし、非主流文化の人々が訓練対象になる場合、三つ目の差異の最小化という段階（つまり、価値観の差異は取るに足らない程度であるという認識）に留まる傾向が報告されている（Hammer 2012）。これは、そのような属性による訓練経過の違いから個人に外在する要因が示唆されているのではないだろうか。

「新しい人種差別」は消えていないか、あるいは古典的差別が影を潜めたからこそ（視点や捉え方は異なるものの）内容的に類似する「不適応」を扱った文献が目立つようになってきた可能性を疑ってみる価値はありそうである。これらの「不適応」の研究は第三のカラー・ラインの概念に接続して語られるべきものではないだろうか。

すでに見たように、現代的課題である異文化「適応」はグローバル社会の中の相対的なパワーバランスの変化の影響が大きいはずで、個人の適性や「適

応」を求められる側の心理的な劣等感に全面的に回収できると措定して、  
は社会学的側面を捨象してしまっている。

以下で、適応の問題が新しい人種差別の言い換えであると仮定した上で冒頭に挙げた第三の問いを検討する。グローバル社会の環境要因とのつながりをみるが、ここでは数あるグローバル環境要因のなかでも中国（台湾、香港除く）の台頭が媒介変数として聞き取りの中から浮かび上がった。

### 2.3 第三の問い：エスニック・ヒエラルキーに綻びはみられるか

実施した事例調査の詳細は稿を改めての発表予定だが、ここではそこから立ち上がった知見から本稿で展開した視点の有効性の提示を試みる。聞き取り調査の対象の属性は注に付した。本稿が拠って立っているネグリらの非・場、脱領域的な拡がりを含み取るため、「日本人」と「西洋人」の接触の場や状況を幅広くとつてもなお共通して対象者の経験の語りから読み込めるエスニック・ヒエラルキーの陰を推しはかった。解釈の枠組みは次の通りである。まず、序列の定義は単元的な評価軸があり、単線的に並べられていることとする。次にその評価を下している主体だが、それは対象者の語り中であらわれた「西洋人」である。最後に誰の認知なのかだが、それは語り手である対象者に属する。また、今回の聞き取りは「日本人」への聞き取りに限定されたので、序列付けをされているという対象者の認識のみで、「西洋人」側が序列づけを行っているのかを問題としていないために上述のような「ヒエラルキーの陰を推しはかる」という表現になった。

2014年に実施した調査で分析に使用する聞き取りは12人から得た。対象者の「西洋圏」とかわりのある部分のライフストーリーと「西洋人」との情緒的かわり、受けいれられている／られていない様子に焦点をあてた。そこから次の三つの知見が得られた。

一つめは2000年代後半になると都市部においての「中国人」のプレゼンスはそれまでと様相を異にし、「日本人」は「中国人」との対比において「西洋的」なものにより近似的に受け取られていると対象者が解釈する経験が珍しくない。すでに前半で記述したとおり、日本や「日本人」は少なくとも前世紀末までは奇妙で非合理的、理解困難で集団主義的であるというラベルを貼

られていた。それが近年になって日本と同様の高額消費者として対比可能となった中国／中国人をキーワードとして、「日本人」が以前よりも「理解可能」とみなされていそうなことが珍しくなくなっている。

二つめに、「西洋的」なものへの近似度による一元的な評価軸は変わらずあり、そこからエスニック・ヒエラルキーの存在が類推される。

三つめに、これは至極当然であるため導きだした過程の詳述は省くが、語りの中から中国の台頭以前から「西洋圏」での日韓の連帯はみられ、また中国の台頭後には日中の連帯も見出すことができるようになった。

一つめの知見を導いた手順を簡便に一つの事例紹介を通して以下に示す。HS 氏のケース<sup>9)</sup>は、中国の台頭以前からの交流ではあるが、2002 年頃、HS 氏が通っていたニューヨーク市内の高校教師の言で、『中国や韓国、台湾などの他のアジア人留学生と日本人は何か違う、何がと言われてもうまくいえないが。』と言われた。」HS 氏のこれに対する解釈は「歴史的経緯からして日本には“西洋”が入り込んでいるから。」であった。2002 年とは本研究で設定している 2000 年代後半という中国台頭よりも時期がわずかにずれるが、場所がニューヨーク市であったことは考慮されるべきである。価値の類似度の同心円状からの距離にもとづく序列のなかの差別は「新しい」人種差別の特徴である。

上記の場合、高額消費者としての中国人留学生の存在が確認されることから（少なくともその高校教師が比較対象として認識するくらいの程度でいたということ）、本稿においては、実質的には中国台頭後の事例として扱う。この事例は、高校教師の発言を受けて、HS 氏（レスポナント）が「西洋的」度合いという単一尺度をもって解釈していることから、本研究において序列があると判断する。

次の語りは同じく HS 氏のもので、補足として提示する。HS 氏の私見では、近年になってアメリカの高級レストランに中国の人々が入り出すようになった。「そうした場でかれらがテーブルの上にどかーんと荷物を置いたり、大声で話し合ったりするのは西洋社会から良く見られていない。」という語りがあった。中国の経済的成功が達成され、「中国人」も「西洋」社会において「新しい」人種差別の対象に新規登録された事例と見てよい。冒頭で紹介したよ



うに「新しい」人種差別は経済的上昇に伴って問題となる(Hagendoorn 1993).  
高級レストランのエピソードは待避的差別ととれる。

この他、別の二人の事例でも日中が直接比較される言葉を「西洋人」に言われたという語りが得られた。その内、ひとつを至極簡便に紹介する。NI 氏のケースは、インタビュー時 20 代前半男性。学部生時代に一年間（中国台頭後の 2011～2012 年）、ロンドンに交換留学。現地の日本好きがあつまる日本文化クラブ（課外活動）の現地人を中心に受け入れられた。NI 氏ご自身は中国にももとは嫌悪感をもっていなかったものの、イギリス人は中国（人）にたいして嫌悪感をもっており、自分が日本人であったから現地人に受容されたと明確な認識を持っていた。

筆者：イギリス的な価値観に馴染めないということはありませんか？

NI：イギリスやヨーロッパの人よりもむしろ、中国の方との差が激しすぎて、むしろ欧米の（人）に親近感が沸いたというのがありますね。  
（中略）中国の人との価値観的な距離を感じました。

筆者：それは、イギリスやヨーロッパの人が、NI さんや他の日本人に対して接する時も中国の人に対するときとは態度が違いましたか？

NI：少なからずあると思いますね。周りの欧州人にアジア人ってどういう風に見られているのかと聞いたことがあったんですね。

日本人は動作とか挙動とかで、中国人とかと区別できるって、それがポジティブな意味で区別できるって言って。中国ってあれだよって、僕が思っているような意見と同じようなこと言ってたんで、やっぱり日本って、そういう意味で位置が高いっていうか（笑）受け入れられている人たちなんだと感じました。<sup>9)</sup>

「周りの欧州人に聞いた」というくだりについては、「日本人」である NI 氏自身が聞き手であったことは忘れてはならないが、日本と中国が振る舞いの部分で比較対象にされることがあったということである。

また、それを間接的に支持する事例は別途二人おり、その内一人は中国台頭前後をまたいだ語りで、2007 年ごろから日本在住の米国人らの間でチャイ

ナバッシングが始まったような印象を持っていた。ここから、HS 氏やNI 氏の抱いた「西洋人」から中国との対比で受ける評価のエピソードは珍しい事例ではないと調査者は判断した。

次に二つめの知見の導出の提示を試みる。上記のHS 氏のエピソードと同一箇所を使うと、『中国や韓国、台湾などの他のアジア人留学生と日本人は何か違う、何がと言われてもうまくいえないが。』と言われた。」というHS 氏の語り中の二重鉤括弧内がニューヨーク市内の高校教師の言である。一つ目の知見の導出過程の説明内でもすでに触れたようにここからHS 氏は「西洋社会」への近似度という「西洋人」の評価尺度を感じ取っていた。NI 氏の事例についても既出の同一箇所からの読み取りになるが、NI 氏の場合、親近感／距離感を抱いていることが明白なのは、NI 氏自身であるが、「(中国人よりも日本人の方が) 位置が高い」と感じ、比較の上でイギリス人に社交の場で受け入れられていると感じていた。ヒエラルキーと評価基準の存在（少なくともその陰）を対象者が感じ取ったことを示している。これらのエピソードは中国台頭後（扱い）で、台頭前と比較する。台頭後の事例と異なり、台頭前の事例においては「中国人」との比較エピソードが調査者があえて問わない限りは語りに現れることはなかった。それは日中が比較対象になっていなかったという可能性もある。こちらから問うと、中国人に間違えられたというエピソードは珍しくないが、そのときに出てくる中国人は高額消費者ではない。つまり、中国台頭前の時代に「西洋人」に日中が比較される場合は高額消費者か否かの点で、本稿に沿った用語で言い換えるとそれは第二のカラー・ラインの侵食度合いによって区別されている事例であった。先ほどみたように、より近年の中国台頭後に分類された事例における比較では第三のカラー・ラインの侵食度合いによって区別されているという違いがみられる傾向が強い。いずれの場合も西洋的なものへの近似度という尺度が参照されているといえ、これにより第二の知見とした。

以上の過程で得られた一つめ、二つめの知見と先述の三つめの知見により、第三の問いに対して次の回答を用意することが可能になった。一見してエスニック・ヒエラルキー、あるいは「日本人」に対しての新しい人種差別的態度の変化としても見て取れる。しかし、台頭後も、西洋世界に重心が乗って

いる視座からの示唆的包摂は根本的に変わっていなかったため、綻びはまだ見えたとは言えないが、中国の台頭は西洋側のアジア認識を刷新し、日本の立ち位置をわずかに変えた可能性がある。

### 3 結論

以上が示唆するところから、冒頭の一連の問いに対する一定の回答が推測の範囲内ではあるが可能となった。

まず第一の問い、新人種差別の研究に日本人が対象になってこなかった背景として次のことが指摘できる。新人種差別のなかでも日本人が対象の場合、特に問題となるのは待避的差別／第三のカラー・ラインの方であるが、当事者がそれを人種差別の問題としては捉えていないことが多い。認識がある場合も漠然として明瞭でないことがほとんどであり（古典的差別は明確に人種差別と認識された）、問題として顕在化してこなかった。

第二の問いの、実際には「西洋圏」において、「日本人」は「新しい人種差別」の対象になっているといえるのだが、先行研究の変遷からその対象になっているケースは珍しくないと考えようである。

第三の問い、エスニック・ヒエラルキーの綻びはみられるのか。聞き取り調査から「中国／中国人」というキーワードが散見された。グローバル社会における脅威としての日本の負のイメージが後退し、いくつかの事例にみるように、入れ替わりに中国の台頭により「新しい（待避的）人種差別」の対象に「中国人」がなりえるようになったため、日中比較しやすくなり、「西洋」の視点からしたら相対的に日本（人）が理解可能な領野の中に見え始めた状況が示唆された。聞き取り内容からはあくまでも「相対的に」受け入れられ易くなったに過ぎず、それは別言すると、示唆的包摂という序列付けのなかで「西洋的視点」においては順位があがっただけであると言え、依然として新しい差別が用意するグラデーションの範囲内にとどまっているに過ぎない。そして、この中国の隆盛は日中が同種の被差別対象としての立場の共有を文脈によってはもたらし得る可能性がみられた。その意味で部分的にエスニック・ヒエラルキーに変化はあったと言えようである。しかし、西洋的

なものへの近似度という尺度に変化はみられなかったことから、根本的な結びは確認できなかった。

総括すると、文献や聞き取りからは実態として「日本人」は待避的差別／第三のカラー・ラインの対象になっていると言えそうだが、それが当人たち、一般の人々、研究者においても明確に認識しづらい諸状況があり、しばしば適応の問題として扱われている。それが 2000 年代後半から日常的な生活空間においても誰の目にも中国の台頭が明確になり、それがひいては「西洋圏」における「日本人」の立ち位置に影響を及ぼした。しかしながらそれはネグリらがいうところの西洋的なものへの近似度合いを尺度とした示唆的包摂の構造にはまだ変化がなさそうであった。

本稿で試行したように、この「新しい」人種差別、特に待避的人種差別／第三のカラー・ラインの概念を持ち込むことにより、エスニック・カテゴリとしての「日本人」がこれまで「西洋圏」においてどのように扱われてきたかを、古典的人種差別からの連続性と変遷のなかで、また文化的覇権があるグローバル社会のなかでの示唆的包摂というグラデーションのなかの昇降現象としてとらえることができた。これによりこれまで「適応」という個人の資質・能力として語られがちであった事象をマクロなグローバル社会の動態とのつながりの中で捉えることが可能になり、今回の知見は今後の変容を追う下地を準備したといえる。

## 注

- 1) <帝国>と括弧付で表記する場合は米国帝国主義などの概念とは異なり、ネグリ&ハート（2000＝2003）の概念を指す。
- 2) 「西洋人」とした場合、アジア系アメリカ人を除外していない。本稿で西洋および西洋に続くカテゴリ、人、および地域の単語を括弧で括る場合、被う範囲があいまいであることを示している。
- 3) エスニック集団とエスニック・カテゴリの違いについては宮原浩二郎（1994）を参照。なお、日本人駐在員の子として現地で生まれた人々については別の考察が必要だろう。
- 4) ただし、新旧の区別はつけられてないが、1933 年の E. S. ボガーダスにも、価値的な違いによる待避的態度という概念はみられる。しかし、古典的差別が潜行したという扱いではないところが異なる。

- 5) Fresh Off the Boat の略. ボートピープルが由来で元来は蔑視語.
- 6) 2005～2013 年までイギリス BBC 放送が毎年行っている世論調査 (BBC Country Rating Poll) で欧米における中国バッシングが高まった時期の大づかみな確認ができる.
- 7) 稲村は西洋先進国間をほとんど区分けせずに分析している. ある日本人家庭が西洋圏の集合住宅で暮らしていて味噌汁のにおいや子供たちの大きな声に近所から苦情が殺到し, 大家に追い出されそうになった事例を出し, 「白人たちは大なり小なりみな聴, 視, 臭の感覚に極度の鋭敏さがあり, その中へ, その方面にはかなり鈍感な (もっとも途上国は一般にもっと著しそうだが) 日本人が住めば, 波紋が起きるのも必然といえる. まことに, 悲劇的な出会いといわざるを得ない」(稲村 1980: 43) とし, 人種偏見とばかり言えない一面と解釈しているが, Hagendoorn の待避的差別に当てはまる.
- 8) 差別が強かった戦時中には, 「人種的」のみならず「文化的」にもアメリカに同化できないという記述が繰り返し確認され, 以前は生物的差異が前面に出ていたがそれが近年になって影を潜め, 残った「文化的」に対する差別が強化された.
- 9) 引用元は筆者の調査結果による. 資料 1 に概要紹介あり.

資料 1 分析対象者 (12 人) の分布

主な交流時の区分	男性	女性	交流相手の国籍	聞き取り時の年齢	主な交流時の社会的立場	交流相手との関係性
中国台頭後	4 人	4 人	フランス, アメリカ, イギリス	20 代～30 代後半	大学生, 会社員, 事業主	級友, 同僚, 交際相手, 純粋な友人, 相手が教員
中国台頭前	1 人	3 人	アメリカ, イタリア, スペイン, ドイツ	20 代～50 歳の範囲	大学生, 高校生, 事業主, 会社員	級友, 同僚, 交際相手, 伴侶, 純粋な友人, ホストファミリー

聞き取り期間: 2014 年度の一年間を通し, 首都圏内にて. 四つの起点をもつスノーボール方式で協力者を募り, 一人あたり 2～4 時間の非構造化面接を実施. レスポンドントは上層の階層であることが多かったが, 各人のより詳細なる属性 (場, 文脈, 関係性, 職業など), 聞き取り日時, および中国台頭時期設定手順の詳述は稿を改めた際に記載する.

参考文献

- Blumer, Herbert. 1965, "The future of the color line," John C. McKinney and Edgar T. Thompson eds., *The South in continuity and change*, North Carolina: Duke University Press, 322-36.
- Bogardus, Emory Stephen, 1933, "A social distance scale." *Sociology & Social Research*, 17: 265-71.
- Dovidio, John F., Kerry Kawakami, and Samuel L. Gaertner., 2000, "Reducing contemporary prejudice: Combating explicit and implicit bias at the individual and intergroup level," Stuart Oskamp ed., *Reducing prejudice and discrimination*. Mahwah, NJ, US: Lawrence Erlbaum Associates Publishers, 137-63.
- Hagendoorn, Louk, and Joseph Hraba 1987, "Social distance toward Holland's minorities: Discrimination against and among ethnic outgroups 1," *Ethnic and racial studies*, 10(3): 317-33.
- Hagendoorn, Louk, 1993, "Ethnic categorization and outgroup exclusion: cultural values and social stereotypes in the construction of ethnic hierarchies," *Ethnic and Racial Studies*, 16(1): 26-51.
- Hammer, Mitchell R., Milton Bennett, and Richard Wiseman, 2009, "The Intercultural Development Inventory," M.A. Moodian ed., *Contemporary Leadership and Intercultural Competence*, CA: Thousand Oaks Sage, 16: 203-18.
- Hammer, Mitchell R, 2012, "The Intercultural Development Inventory: A new frontier in assessment and development of intercultural competence," M. Vande Berg, R.M. Paige, & K.H. Lou, ed., *Student Learning Abroad*, Sterling, VA: Stylus Publishing, 115-36.
- 櫛本崇恵, 2009, 「海外における日本人留学生が体験した社会的・文化的異質性嫌悪に関する一考察」『天理大学人権問題研究室紀要』12: 13-28.
- 稲村博, 1980, 『日本人の海外不適應』日本放送出版協会.
- 岩崎信彦, ケリ・ピーチ & 宮島喬編, 2003, 『海外における日本人, 日本のなかの外国人: グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂.
- Kovel, J., 1970, *White racism: A psychohistory*, New York: Pantheon. Reprinted in: Kovel, Joel, 1988, *White racism: A psychohistory*, London: Free Association Books.

- Michael Hardt & Antonio Neguri, 2000, *Empire*, Harvard University Press. (=2003, 水嶋一憲他訳『＜帝国＞』以文社.)
- 宮原浩二郎, 1994, 「エスニックの意味と社会学の言葉」『社会学評論』44(4): 6-19.
- Pearson, A. R., Dovidio, J. F., & Gaertner, S. L., 2009, "The nature of contemporary prejudice: Insights from aversive racism," *Social and Personality Psychology Compass*, 3(3): 314-38.
- Pyke, Karen, and Tran Dang, 2003, "'FOB' and 'whitewashed': Identity and internalized racism among second generation Asian Americans," *Qualitative Sociology*, 26(2): 147-72.
- 関根政美, 1994, 「脱工業社会とエスニシティ: 『遠隔地ナショナリスト』と新人種差別」『社会学評論』44(4): 36-51.
- 津久井要, 2001, 「海外勤務者のメンタルヘルス (異文化ストレスとの遭遇)―(海外勤務, 海外渡航に伴うストレスをめぐる諸問題).」『現代のエスプリ』412: 34-45.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学: 現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会.

## 付記

本稿で取り上げさせていただいたHSとNIの両氏には同意書を取り交わした上でインタビュー調査させていただいた。記して感謝したい。

(まえだ さとし・首都大学東京大学院博士後期課程)



## **Aversive Racism and “Japanese” Category** Hierarchy Based on Degree of Behavioral Code Sharing Across *Empire*

MAEDA, Satoshi

Are common sense and behavioral codes becoming more commensurable across national and ethnic boundaries as globalization advances? Aversive racism, also known as the third color line, is a different concept than the classical understanding of racism, which is based on biological differences. It is a social boundary based on behavioral codes and differences in social norms. It arose in the post-industrial globalized society and demarcates peoples in personal settings even after political and economic boundaries are overcome.

This research pursued subjective experiences that Japanese people undergo in “Western” societies. The literature review was made mainly on those from the J-Stage platform and well-known literature from other sources. Based on the literature review and incorporation of data retrieved from interviews conducted separately, three findings were derived: (i) reflecting the rise of China, the “Western” attitude towards “Japanese” people might have relented; (ii) Japan is no longer the lone player from the East in the West; and (iii) the basic structural frame of ethnic hierarchy has not changed in terms of the Western-centric perspective. The third finding was drawn based on empirical qualitative research involving 12 interviews with Japanese men and women who have rich experience dealing with “Western” people. The interviews focused on their relational fitness with “Westerners”. The results suggest that the arrays of previous research which labeled certain behavior as “cultural unfitness” or failure of “cultural adaptation” described a phenomenon that other people called “aversive racism” or “new racism”.

This new racism, which the “Japanese” occasionally face, sheds light on the dynamics of ethnic hierarchy that otherwise might be obscured. Therefore, more attention and further developments in this line of research is necessary.

Keywords: modern racism, the third color line, cultural adaptation